

# モノからみた居住空間の特性に関する研究

## ー 宮古島市平良地区狩俣集落を事例として ー

### Keywords

モノ 高齢者 居住空間  
バリアフリー



K09035 倉持 翔

## 1. はじめに

### 1.1 研究背景

現在の日本の住宅は、社会の高齢化にともなって、バリアフリーの概念を住宅に取り込むようになった。その一方で、全国各地で同じような住宅が建てられ、似通った空間構成が多くみられる。3年次の建築ゼミナール2の研究では、自分の人間性を見出す為に、自分の部屋をモノに着目して考察した。そこで筆者は、似通った居住空間でも、その使い方は人それぞれ異なり、多様であることに気付いた。同じモノでも住み手がどのように使い、どこに置くかによって、居住空間が個性的になるのだと考えた。建築物は、単なる物質に過ぎないが、人が住み、生活することによって居住空間としての個性が生まれる。そこで、居住空間に個性をもたらす上で重要な要素であるモノに着目したい。

筆者の所属する清水研究室では、自然発生的な集落を対象としたフィールドワークを通し、住宅の調査を行ってきた。そして2012年の夏に、筆者は沖縄県宮古島市平良地区の狩俣でのフィールドワークに参加した。

宮古島市平良地区狩俣では、神話にもとづく祭祀集団などの宗教的世界観が特徴のひとつである。また、地理条件から、沖縄、宮古島、本土、中国、台湾などさまざまな文化の影響を受けている。そして、離島であることから都市で見られるほど、住宅のバリアフリー化は行われていないと予想される。

高齢者が多い離島だからこそ、住宅のバリアフリー化に依存せずに暮らしていける何らかの工夫や、私たちの知らない居住空間と地域社会の関わりがあろう。それらがどのように住宅に表れているのだろうか。フィールドワークを通し、探っていく。

### 1.2. 研究目的

筆者は、モノからみる人々の居住空間、とくに高齢者の居住空間についての研究をおこなう。そこで、よく使われる場所と考えられる居間にあるモノに着目する。住み手の個性と居住空間の関係をj知る上で、モノと居住空間を相互に見ていく必要があると考えたからである。

本研究は、フィールドワーク調査が軸となる。住み手の工夫や趣向を観察し、ある程度の数の住宅からうかがえる傾向を分析する。そうすることで狩俣集落の特徴を述べ、高齢者の居住空間について考察することを目的とする。

## 1.3 調査内容

本研究は、2012年7月25日～2012年8月10日の17日間、沖縄県宮古島市平良地区狩俣で行った調査に基づいている。調査では、住居実測による平面図、屋敷図の作成を行った。平面図には住宅内のモノも書き込んだ。聞き取り調査では、各家庭につき一人を対象としたインタビューを行った。これは、居住者のありのままの生活の実態を知る上で重要である。

## 2. 調査地の概要

### 2.1地理気象

狩俣は、宮古島の中心的市街地である平良から北方へ車で20分ほどで、西平安名崎の付け根に位置する。集落の北東部には標高20～30メートルの丘陵が細長く続いており、「フンムイ」と呼ばれる神聖な森となっている。北側にナービィダ、南側にマイビィダと呼称する浜があり北、東、西の三方を海に囲まれている。総人口762人（男性370人、女性392人）である。

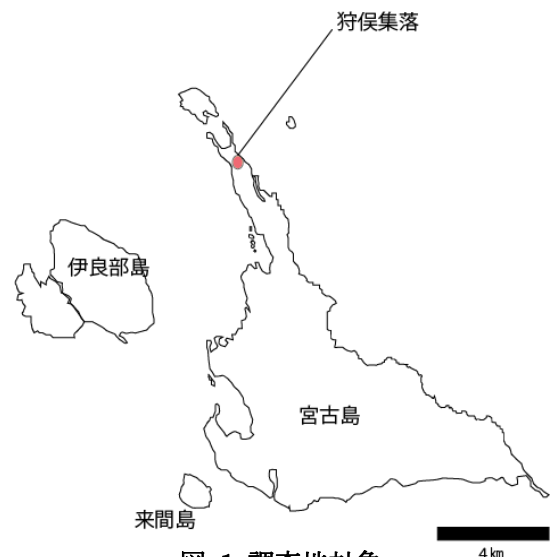


図 1 調査地対象

狩俣は、宮古島の中でも比較的古くから存在する集落といわれ、15世紀に宮古島を統治した仲曾根豊見親の時代、大神島、池間島、狩俣、伊良部島を治める四島の主（ユスマノシュ）が居住した地でもある。かつてはこの村の周囲は石垣で囲まれており、集落の南東端と、集落の北西側の森と集落との境目には、現在も石でできた「トゥリヤ」（通門）が現存する。この石垣・石門は宮古島でも狩俣のみにみられる特

徴である。

各戸の周囲には、かなり高い防風林が生長しており、村落全体として落ち着いた豊かなたたずまいとなっている。

## 2.2 住居の伝統的な間取り

住居内部は、タナと呼ばれる先祖の魂を祀る仏壇を中心に構成されている。仏壇があり、食事をしたり、くつろいだりする空間を二番座という。非日常時に客人を招く部屋である一番座は神聖な方向である東側に配置されている。反対に炊事場などの日常的な空間は西側に配置されている。

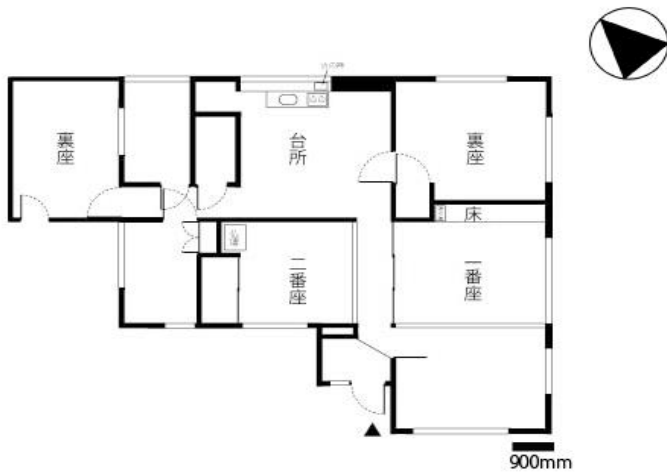


図 2 狩俣集落の伝統的な間取り

## 3. 狩俣における高齢者の生活

調査では、43軒の住居の実測、インタビューを行った。さらに、老人クラブ会長、役員に対してもインタビューを行った。ここでは、インタビュー調査をもとに高齢者の日常的生活の実際を明らかにしていく。

### 3.1 老人クラブ

狩俣では、還暦を迎えると老人クラブに自動的に配属される。毎年、一万円の費用がかかる。しかし、インタビューによるとただ会費を支払っているだけという人も少なくはなかった。行事は、すべて集落内で行われており、高齢者が行事に参加しやすく、多くの高齢者がコミュニケーションの場として参加していると考えられる。老人クラブという社会組織が高齢者の日常的生活を支えているのである。



図 3 老人クラブの活動箇所

## 3.2 家族構成ごとの暮らしぶり

以下では、狩俣の家庭を高齢者の一人暮らし、高齢者のみで暮らしている夫婦、核家族、その他の四つの家族構成ごとに分類し、考察を進めていく。

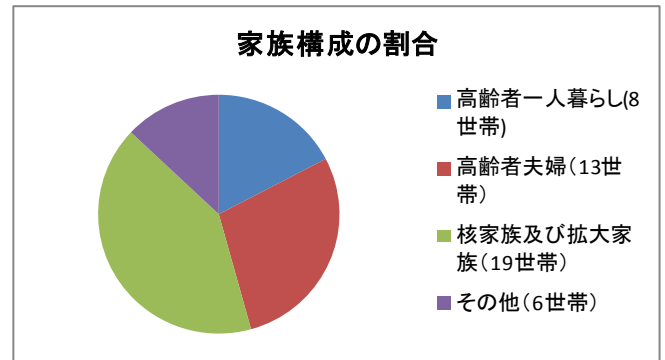


図 4 家族構成の割合

### 3.2.1 高齢者ひとり暮らし

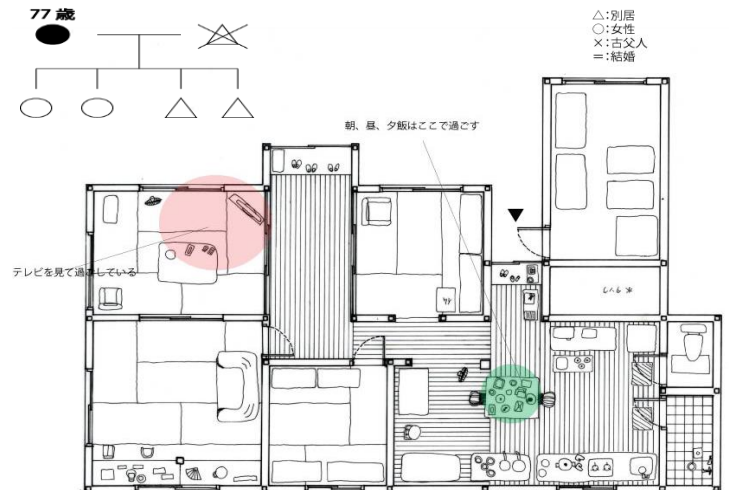


図 5 No.38 平面図

一人暮らしの高齢者といっても、多くの場合ゲートボール、グランドゴルフで友人とコミュニケーションをとっている。また、同窓会のような行事に参加したり、職場でコミュニケーションをとったりしていることがわかる。息子が毎日訪れるという家庭も見受けられた。

### 3.2.2 高齢者夫婦

高齢者夫婦と高齢者ひとり暮らしの日常は、特別な変わりはない。高齢者夫婦でもゲートボール、グランドゴルフで友人とコミュニケーションをとったり、息子、娘が狩俣に定期的に訪れるなど日常的生活のなかで多くの人と関わり合っている。また、老人クラブの行事に参加しない人は職場でコミュニケーションをとっていた。

### 3.2.3 核家族および拡大家族

父、母の介護を目的として、一緒に暮らしているケースが多い。子が、仕事、買い物、介護などの面で、高齢者の日常的生活を支えているのである。

## 4. 狩俣の住宅

### 4.1 住宅の建設年代

ここでは、建て替え、もしくは改築が行われた住宅を明確にし、建替え、改築の行われていない住宅と比較し考察する。

### 4.2 住宅のバリアフリー化

ここでは住宅のバリアフリー化がどれほど行われ、どのように高齢者の生活を支えているのかを実測調査から例をあげ、考察する。

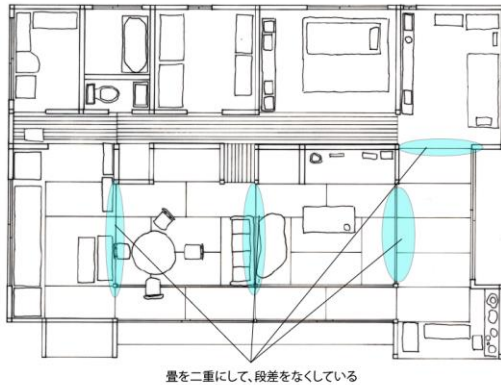


図 6 住宅No.47平面図

狩俣でのバリアフリー化は3事例しか確認できなかった。このことから、狩俣での住宅のバリアフリー化はほとんど進められていないといえる。バリアフリーに依存せずに暮らしていける工夫や、暮らし方がなにかを、次の章で探っていく。

## 5. モノと居住者

ここではモノの観点から居住空間を考え、高齢者がどのような工夫をしながら日常生活を送っているかを探る。

### 5.1 各部屋のモノの傾向

一番座、二番座、裏座、の各部屋にあるモノから各部屋でどのように工夫をしながら日常生活を送っているのかを探る。

#### 5.1.1 一番座

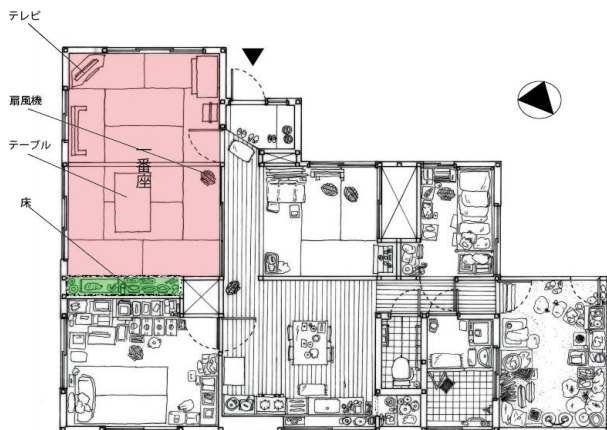


図 7 No.154 平面図

No154の住宅を例に挙げる。一番座には神棚、机、座布団、扇風機などが置かれていた。基本的にモノが少なく、片付けられている。一番座にある、床には、大きいサンゴ、表彰状、家族写真、家紋、伝統的な人形、高価なつぼなどが置かれていた。客人を迎えるにふさわしく、床には客人に見せたい、自慢したいようなモノが置かれている。しかし、このように一番座の機能を果たしている住宅は少なく、ベッド、ソファ、散らかった洋服、タンスといったものが置かれている住宅が多くみうけられた。用途としては就寝や休憩に使用すると考えられる。

#### 5.1.2 二番座

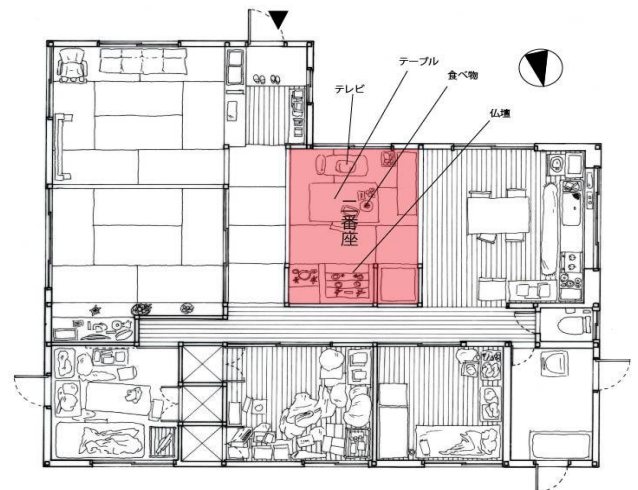


図 8 住宅No.8 平面図

No8の住宅を例に挙げる。二番座は、たいていの住宅で玄関に続く位置にある。テレビ、テーブルが置いてあり、ほとんどの事例で、マウ棚、仏壇が置かれていた。ソファやイスが置かれていることが多いが快適に過ごすための工夫とみられる。また、布団や台所で使う包丁、まな板が置いてある住宅も多くみうけられた。一番座と比べると、二番座には、食べ物、テレビ、ソファなどがありより過ごしやすい部屋になっている。

#### 5.1.3 裏座

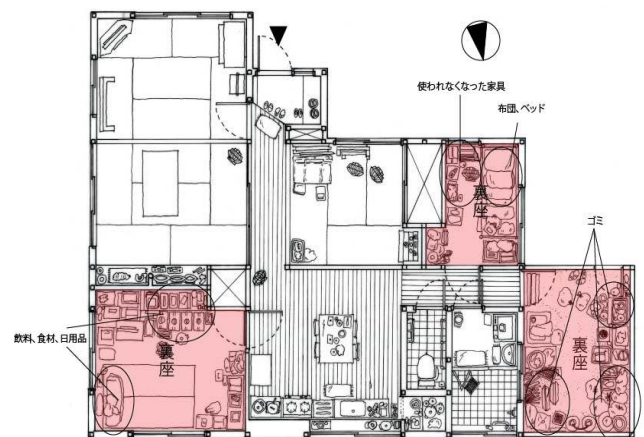


図 9 No.154 平面図



No154の住宅を例に挙げる。この住宅の裏座には洋服、タンス、ベッド、布団、使われなくなった家具、ゴミが置かれており、物置の用途として使われていた。市街地まで遠い理由で、飲料、食材、日用品を買いだめして、裏座に置いておく傾向も強い。

## 5.2 一番座の機能の変化

伝統的に一番座は、一般的に客間を指しているが、実際にインタビューを行った際に客人が来ることはほとんどないという家庭が多かった。

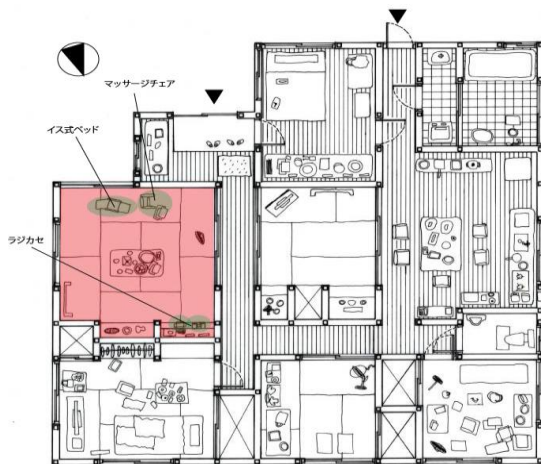


図 10 No.57平面図

図10に示した住宅の一番座には、イス式のベッド、マッサージチェア、脱いだ後の服、ラジカセが置いてある。主に、二番座、裏座に置かれるようなモノである。しかし、同時に、伝統的な人形、家族写真が飾られていた。足の不自由な高齢者が住んでおり、玄関から近い一番座に、イス式のベッドが置かれている。一番座は、生活の必要から、モノを置かない裏座の機能をもつようになっている。

## 5.3 よく使う部屋のモノ

ここでは、モノに着目して、日常的によく使う部屋でどのようなモノに囲まれて生活を送っているのかを調べる。

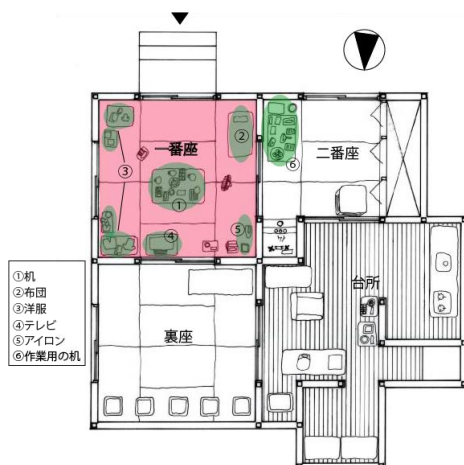


図 11 住宅No.41平面図

図11に示した住宅では、①の机の上にはテレビのリモコン、本、飲み物が置いてあり、④テレビがあり、モノの面から一番座をよく使っていることがわかる。また、その他に③脱ぎっぱなしの洋服、⑤アイロン、②布団がある。そして台所周辺にはほとんどモノがない。そのうえ、二番座にある⑥作業用の机も、一番座に近い位置にあり、あまり動かずに、ひとつの部屋でほとんどの行為をし、ほとんどの時間を過ごしていることがわかる。1つの空間に2つあるいは多数の機能を持たせているのである。これらは、高齢者の居住空間の大きな特徴なのではないかと考えられる。歳を重ねる度、足腰が悪くなったり、体力も乏しくなっていくため、いろいろなモノを自分の身の回りに集めることで暮らしやすくしていくのだろう。

## 6. おわりに

狩俣の住宅には、バリアフリー化はほとんどみられない。すなわち、物理的に空間を改変することは少ないのである。その代わり、モノを身の周りに集め、自身にとって快適な空間を作り、空間の使い方を工夫している。ただし、それをするすることで、空間の機能は元々のものから変わる。それでも、間取り自体は、それほど変わらない。住宅は、間取りはかつてのままで、その上で行われる生活が社会の実情に合わせて変化している。

その他、高齢者を支える社会の役割、老人クラブ、儀礼などもある。そうした狩俣の社会と住宅のあり方は、離島という地域性を反映しているが、現代の我々の生活にも、多くのことを示すだろう。

現在、日本は超高齢社会という問題を抱えており、人口は減少しつつある。人口の減少により日本の居住空間は必ず変化するであろう。狩俣のような、居住空間や社会組織のあり方が居住空間を組織するうえで、参考になりうるだろう。

## 参考文献

- 1) 芝浦工業大学工学部建築工学科2012 卒業研究梗概集
- 2) 宮古島の祭祀歌謡からみた女神
- 3) 狩俣の祭祀継承の深層と現状
- 4) 狩俣の神々
- 5) 在沖狩俣郷友会30周年記念事業期成会（平成11年1月11日）  
「在沖狩俣郷友会30周年記念誌」
- 6) 石毛直道「居住空間の人類学」
- 7) 鶴藤鹿忠「琉球地方の民家」